

『オリエンタリズム』と私たち

杉田英明

エドワード・サイードの『オリエンタリズム』は、きわめて知的刺戟に富む問題提起の書物である。

本書は、ヨーロッパのオリエンタリズムに対する物の見方・考え方を広く「オリエンタリズム」としてとらえ、そこに連続として受けつがれてきた一貫した思考様式の構造と機能を分析すると同時に、そのような知のあり方に厳しい批判を加えた作品である。もちろん、これまでにもヨーロッパとオリエンタリズム（東方）の関係を主題とした書物は数多く書かれてきた。だが、それらの著作は、専門家や研究者を対象とする歴史の概説や通史・研究史、あるいは百科全書的記述にとどまるものがほとんどであった。したがって、本書のように鋭い問題意識と新しい視角に基づいた作品が、刊行以来、狭い専門家読者の枠を超えて広く迎えられ、いわば話題の書として、賛否両論を含め実に多くの議論をよびおこすことになったのも当然のことといふべきだろう。一九七八年の刊行直後、英語圏の新聞・雑誌には（一般誌と専門誌とを問わず）数多くの書評が寄せられたばかりでなく、一九八〇年にはフランス語訳、一九八一年にはドイツ語訳およびアラビア語訳が相次いで出版され、それぞれの読書界をにぎわすこととなった。また学界では、サイードの『オリエンタリズム』に触発された形で、オリエンタリズムを再考するための活発な議論

が展開されている⁽³⁾。そして、その波紋の一端は、すでにわが国にも及んでいるのである⁽⁴⁾。

このたび『オリエンタリズム』の邦訳が上梓されるにあたり、ここでは、これまでに同書に寄せられたさまざまな論評をも踏まえつつ、その内容と意義を簡単に紹介・検討し、さらに日本人として、私たちがこの書物をどのように受けとめ、どのように生かすことができるのか、いくつかの論点をめぐって考えてみることにしたい。

一

『オリエンタリズム』の斬新さは、何といっても「オリエンタリズム」という言葉の新しい概念規定、ならびに、その対象に対する著者の批判的姿勢にあるといつてよい。「オリエンタリズム」という語は従来、ロマン的な異国趣味に彩られたヨーロッパの文芸・絵画上の一潮流、ないしは東洋研究・東洋学という意味で用いられる、いささか古めかしい言葉であった。これに対しサイードは、この語をまず「オリエンタリズム」に対するヨーロッパの思考の様式⁽¹⁾または知のあり方、物の言い方（言説）と広く規定したのち、次にそれが「オリエンタリズム」に対するヨーロッパの支配の様式⁽²⁾でもあったことを示して、これを批判する。第一の規定に基づいて、きわめて多種多様なテクストにみられるオリエンタリズムという思考様式の一貫した構造が明らかにされる一方、そうした知の形態のもつ機能——すなわち、知と力が結びつき、オリエンタリズムが支配の様式になっていく過程も分析され、批判されるのである。

本書のこうした特徴が、著者自身の出身や経歴と深く関わっていることはいうまでもない。つまり、サイードが第一に、西洋植民地主義の惨禍を蒙ったパレスティナ人として、植民地主義を生みだした西洋的な知のあり方に批判的な問題意識をもっている点、第二に彼が東洋学の専門家ではなく、フランス構造主義の影響を受けた現役の英文学者・文芸批評家である点、これらがそれぞれ、本書にみられる批判的姿勢と分析の斬新さとを生みだしていると考えられるのである。

。私たちは本書を通読して、著者の分析の冴えと同時に、ヨーロッパの知を支配してきたオリエンタリズムの力の強大さにも驚かざるをえないだろう。

サイードによれば、オリエンタリズムの根底にあるものは、「東洋」と「西洋」とのあいだに本質的な差異があるとすると、存在論的・認識論的区分に基づく見方であるという。アイスキュロスやダンテの時代から、「西洋」の人間にとって「東洋」とは、自分たちの住まう空間とは全く異質な空間であり、曖昧性・敵対性・遠隔性の象徴であった。人間精神は、こうした異質で曖昧な未知の実体を、一定のイメージや図式・語彙などによって表象することで馴化し、自己に把握可能なものにしてしようとする傾向をもつ（心象地理）。これらの表象は、ヨーロッパの伝統のなかで次第に強化され、オリエンタリズムに関する特定のイメージや決まり文句、語彙、形象、観念、ドグマなどの総体を形成するようになる。やがてそれらは、西洋人がオリエンタリズムを眺めるさいのレンズの役割を果たす一方、近代的文献学や比較言語学の発達に伴う専門用語や職業的慣習・組織の確立とも相俟って、学術的なディシプリン（規律・訓練）を課され、制度化されて、オリエンタリズムに関するあらゆる陳述を支配する画一的な権威（ないしは真理）へと育っていった。

オリエンタリズムについてものを書く人間は、すでに書かれたテクストを引用することで、ますますこの権威を強化した。また、実際にオリエンタリズムを旅し、オリエンタリズムに居住する西洋人は、彼らがいかに想像力に富み、いかに个性的でいかに共感的であろうと、やはりこの権威から自由ではありえず、現地で自分の眼で見たものよりも、こ

いっそう広く包括的な、人間経験一般に関わる根本的な疑問にまで昇華されている点も重要である。それらの疑問は著者自身の手で、本書の末尾近く(三二九頁)に次のような言葉によって整理されている。

我々は異文化をいかにして表象することができなのか。異文化とは何なのか。ひとつのはっきりした文化(人種、宗教、文明)という概念は有益なものであるのかどうか。あるいは、それは常に(自己の文化を論ずるさいには)自己讚美か、「異」文化を論ずるさいには)敵意と攻撃とにまぎこまれるものではないのだろうか。文化的・宗教的・人種的差異は、社会・経済的・政治・歴史のカテゴリーより重要なものといえるのだろうか。概念とはいかにして権威、「正常性」、あるいは「自明の」真理という地位を獲得するものなのだろうか。知識人の役割とは何であるのか。

これらは本書の至る所でくり返し提起され、読者に投げかけられている問題である。その多くは、著者によって解答が示されぬままにおわっているが、それだけにかえって、本書は読者にさまざまな立場からの関与を求めてやまぬ、開かれた著作であるということもできる。いわば『オリエンタリズム』は、著者の批評家・人文科学者としての手腕と、アラブの側からの批判意識とが、「オリエンタリズム」という対象に向かって——そしてそれをつきぬけて——存分に發揮された、画期的な著作であるということができるのである。

をもちたしているという指摘も行なわれている⁽⁹⁾。この指摘は、ある程度まで正鵠を射たものであるように思われる。

次に、第二の問題点としては、本書全体に不正確な引用や事実の誤認、外国語(フランス語・ドイツ語・アラビア語)の訳や転写の誤りといった細かなミスがかなり多く見られたことをあげねばならない⁽¹⁰⁾。邦訳では、訳者らの気づいた限りにおいて、訳注等の形でそれらを指摘しておいたが、本書のように一つの学問分野や学者のテクストに対する批判的性格が強い著作の場合、それらのミスが重大な意味をもつことにもなりかねないので、とくに注意すべきであったことが惜しまれる。

だが、これらの点がいずれも部分的かつ形式上の問題点であるとするれば、本書の主張全体に関わる、より本質的な問題点は、さらに別のところにあるといわねばならない。すなわち、著者自身も記しているように、

オリエンタリズムに代わる別の選択肢とは何なのだろうか。本書はただ何かに反対するばかりで、積極的に何かを主張する、建設的な議論ではないのだろうか。

という疑問に集約される一連の問題がそれである。たしかに著者は、「私のプロジェクトはひとつの特殊な観念体系を叙述することである」として、その体系を新しい体系におきかえることではなかった⁽¹¹⁾(二九頁)と述べており、オリエンタリズムに代わるものを提示することが、もともと本書の直接の目的でなかったことは明らかである。

だが、このようにきわめてブリリアントな作品といつてよい『オリエンタリズム』にも、いっぽうから見るとさまざまな問題点が含まれていないわけではない。それらは刊行以来、多くの書評のなかで指摘されてきたものであるが、ここでは、それらのなかでもとくに重要と思われる論点をいくつかとりあげておくことにしたい。

まず、かなり多くの論評に共通して見られた指摘は、本書の表現・文体上の問題である。サイドは永年英語圏で生活し、現在に至るまで英語をその主要な表現手段として用いてきた。したがって、英語は彼にとってほとんど母国語同様の地位を占めているといつてもよいはずだが、それでも本書には、正統的な英語の語法からすればやや不自然な表現の見られることが指摘されている。これは、第二の言語——選びとった言葉——としての性格上、やむをえないことであつたかもしれない。だが、本書全体にはアメリカのアカデミズムの専門用語やサイド特有の批評用語が多用されており——たとえば doxological, dynastic, beginnings——それが、この方面に不案内な読者にとってのある種の読みにくさの原因となつていゝことは否定しがたい点である⁽¹²⁾。また、本書には、著者のオリエンタリズムに対する義憤や、分析・批判への情熱が底流しているため、それが用語の選択や表現に必要以上の陰影を投げかけ、時として「言葉のインフレーション」をひきおこして読みにくさを助長するとともに、著者の分析を曇らせ、本文解釈の行きすぎ、深読みのおそれ

そして著者は、みずからそれを示すかわりに、オリエンタリズムを超えるいくつかの具体的な業績——たとえばアラブ・イスラム研究の分野におけるロダソン、オーウェン、ベルクらの仕事——を挙げることで、右の疑問に答えようともしている。さらに著者の志向は、「オリエンタリズム再考」のなかで列挙された数多くの著述によつてかなり明らかにされたともいえる。だが、それでもなお読者は、依然として、オリエンタリズム批判のあとにくるもの——「支配的でも強制的でもない知のあり方」——が何なのか、そもそもそのようなものが可能なかを十分に提示されていない点で、曖昧さと不満とを覚えずにはいられないのである⁽¹³⁾。

このような疑問は、実は著者の「オリエンタリズム批判」に底流するある曖昧さとも関わりあつていゝように思われる。すなわち、著者はいっぽうで、オリエンタリズム的な知を原理的にことごとく否定するかと思われる立場に立ちながら、他方では、そのオリエンタリズムのディンプリンのなかから「方法的自覚」をもって新たに生まれ出た、ベルクやロダソンの業績を高く評価している。いったい、著者にとつてオリエンタリズムは、(その成果たる「実証的」知識も含めて)原理的に根底から葬り去られるべきものなのか、それとも、実際上何らかの矯正を施すことによつて蘇生させるべきものなのか——その点が読者に必ずしも明確にはされていないのである⁽¹⁴⁾。

そもそも、サイドがオリエンタリズムの基盤として指摘する「心象地理」的な他者理解や、知識と権力の結びつきなどは、オリエンタリズムに限らず多くの学問・科学に特有のものであろうし、

真理が表象にすぎず、純粋に客観的な知などありえないとする立場もまた、すべての学問分野に対して主張しうるものであろう。したがって、サイドの批判を厳格に適用していけば、およそいかなる知、いかなる学問といえども——ベルクやロダンソンの仕事も含めて——その批判を免れることはできないことになる。そのため、サイドの著作に対する建設的論評のなかには、サイドの批判を原型的には受け入れつつも、それを極限までおしすすめてすべてを破壊しつくすかわりに、むしろ旧来のオリエンタリズムの実証的成果の利点を生かし、その欠陥を批判的に克服することで、オリエンタリズム批判をのりこえようとする主張が見られたのも当然のことといわねばならない。

まず、オリエンタリズムの利点や成果を擁護する立場について見れば、その主張は、「いったいオリエンタリズムとは、サイドのいうほど均質的、画一的なものであろうか」という疑問と結びついているといってよい。すなわち、サイドが「オリエンタリズムは個人としての人間を論ずることには興味をいだかず、また、それを論ずる能力をもっていない」(一五八頁)と断言するとき、彼もまた、みずからが批判するオリエンタリズム的「一般化」の通弊におちいってはいないだろうかというのである。このような疑問を発した論者の一人、アルバート・ホウラーニーは、サイドの意図があくまでもオリエンタリズムの理念型を提示することにあつた点を指摘して、彼の立場を擁護しつつも、なお、この理念型から大きく逸脱する学者の少なくないことを強調し、サイドにやんわりと異議を呈している。ホウラーニーによれば、オリエンタリズムの伝統

ることによって、オリエンタリズムをのりこえようとする動きが見られたことも注目に値する。なかでも中国研究者のベンジャミン・シュウォルツは、地域研究をオリエンタリズムの直系の子孫ないし現代的変種とみなすサイドの観点に異議を呈し、むしろ地域研究者こそ、従来のオリエンタリストがおちいって陥穽——異文化の心象地理的理解、西洋中心の歴史主義——から自由になる可能性もっていることを強調する。とくに、「地域研究」という用語の指示対象が曖昧である点を逆に評価して、それが、オリエンタリズムにみられた類の実体のない「オリエンタ」、抽象的でカテゴリー化した「オリエンタ」の形成をさまざまにあげると主張する。すなわち、東アジア研究の専門家が、たとえば「東アジア文化圏」に対しても、また中国・日本・朝鮮・ヴェトナム等のそれぞれに対しても、「地域」という語を用いうるように、

「地域」という語は、その焦点がいかに変化しようと、つねに地方的諸条件の特殊性を重視した首尾一貫性の具体的原理に基づいて構成されるものである。イランからモロッコまで、アッバース朝からホメイニーまでのあらゆるものを一箇の同質的・不変的なイスラムの一部にすぎぬと考え、それを「オリエンタ」とよばれる曖昧な実体のなかに溶解させてしまう人々に対しては、地域研究の専門家もまた、サイドと怒りをともにすることができているのである。

と述べている。⁽¹⁹⁾

のなかでも、とくにイスラム神学・法学研究、スーフィズム研究の分野における業績——マシニョンのハッラージュ研究、ラウストのイブン・タイミーヤ研究、リッターのアッタール研究など——は、サイドのいうオリエンタリズムの非難を免れるべきではないかという。そしてサイドがそれらを見落とした理由として、第一に彼がドイツ・オリエンタリズムを除外したこと、第二に、法・神学研究自体がきわめて地味な分野であることを挙げている。また、現代アメリカのオリエンタリズムにおいて、文学研究が「奇妙に欠落」しているというサイドの批判にもかかわらず、むしろアラブ文学研究においてこそ、従来のディシプリンを打ち破る画期的な仕事が生まれつつあるのだとする重要な指摘もある。それは、社会経済史におけるクロード・カエンや「アナル」派の業績についても、同様にいえることかもしれない。さらには、欧米で中東研究に携わる中東出身の学者——たとえばG・C・アナワティ、G・マクドス、F・ズィヤーデ——の仕事が視野に入れられていないこと、中東世界内部の研究者や研究施設が不当に低く評価されていることに対して、批判がなされていることをつけ加えておきたい。つまり、これらの議論に従えば、伝統的なオリエンタリズムの潮流のなかからも、サイドのオリエンタリズム批判の射程外にある学者や業績が——少なくともサイドが考える以上に多く——生まれており、そこに、オリエンタリズムにとつてかわる、新たな知の萌芽を見ることができるといえるかもしれないのである。

いっぽう、合衆国の南アジア・東アジア地域研究者の側からは、サイドの批判を踏まえつつ、逆に「地域研究」を積極的に擁護するたしかに、ここでやや抽象的に示唆されているような、「地域研究」における「地域」概念の可変性——より積極的というなら、地域設定の組みかえの可能性——は、中東の地域研究を考える場合、とくに重要になってくるように思われる。なぜなら、しばしば指摘されるように、中東においては、個人がはげしいアイデンティティ複合のもとで暮らしており、(たとえば一人の人間が場合によってエジプト人であったり、アラブであったり、イスラム教徒であったりするように) つねにアイデンティティを選択的に獲得すること、個人が自己の属する地域を主体的に設定しなおしているともいえるからである。したがって地域研究者の側でも、オリエンタリズム的な「イスラム教徒」「東洋人」等々のカテゴリー化の弊害に陥らぬために、つねに自分の対象とする地域を可変的に組みかえていく必要に迫られているのであり、シュウォルツの主張するとおり、そのような要請に答える所にこそ、「地域研究」の強みがあるといってもよいのかもしれないのである。

さて、これまで『オリエンタリズム』に対する反応のうちで重要なものをいくつか整理・紹介しつつ、簡単な論評を加えてきた。だが、あまり従来の書評等では指摘されることがなかったにもかかわらず、オリエンタリズムを考える上で見逃すことのできない、別の重要な論点にも触れておく必要があるかと思われる。それは、いわゆる「ユダヤ人問題」に代表される、「内在化された東洋」の問題である。

サイドは、オリエンタリズムの根底に「東洋」と「西洋」とい

う根源的区別が横たわっていることを強調し、西洋が東洋をつねに外在化してやまず、それによって逆にみずからのアイデンティティを形成してきたのだと論じている。このこと自体は勿論、正当な議論なのであるが、そこで彼は、東洋と西洋の差異を強調するあまり、西洋の内側にもつねに「東洋」が——たとえば「ユダヤ人」、ジプシー、フリーメイソンといった形で——内在化され、つくられつつけてきたことを見逃してしまつたのではないだろうか。少なくとも『オリエンタリズム』においては、外在化された東洋、境界線の向こう側に横たわる異質な空間としてのオリエンタルばかりが主に問題とされ、ヨーロッパ社会内部に社会的差別としてつくられた東洋については、あまり多くが語られていないように思われる。

だが、たとえばヨーロッパ社会内部における「ユダヤ人問題」についていうならば、それは、ヨーロッパのオリエンタリズムを形成する重要な要素であつたはずであり、ヨーロッパの反セム主義から現代のパレスティナ問題にまで直接かかわってくる点で、サイドにとつてもまた、いっその重要性を帯びてくる問題であるだろう。とくに、板垣雄三教授が述べているように、

ヨーロッパの社会の内部でユダヤ人として眺められた人々の中に、実はヨーロッパの人々は東方というものを見出し出していたわけがあります。いわば東方の鏡というか、東方がそこに写し出されるような存在としてのユダヤ人というものが、ヨーロッパ社会の真只中にすえつけられているという認識であります。(中略)例えば、十字軍が東方に向って歩き出すところで、ヨーロッパの民衆

紀にいたるまでユダヤ人説はまことしやかに語られていたのである。⁽²²⁾

という。ジプシーもまた、ヨーロッパの民衆にとっては身近な場所

で、恐怖として感じられる「東洋」のひとつなのであつた。勿論これらは、ヨーロッパ社会史の問題として、また女性・同性愛者・囚人等と並ぶ社会的「疎外者」の問題として、すでにさまざまの研究がなされてきた分野なのかもしれない。しかし、ヨーロッパのオリエンタリズムを論ずる上では、それがまた重要な論点となるはずであり、サイドがあまり触れなかつた「内在化された東洋」について、私たちは十分補って考える必要があるように思われる。それによって、ヨーロッパの「東方」観の構造は、よりいっそうはつきりと私たちの視野に入ってくるに違いないのである。

三

これまで『オリエンタリズム』の内容にそくして、いくつかの問題を検討してきたが、ここで、『オリエンタリズム』と私たちの関わりあいについて、つまり、私たちが日本人として『オリエンタリズム』の問題提起をどのように生かすことができるかについても考えておくことにしたい。

この点に関し、まず何より重要なのは「日本のオリエンタリズム」の問題であろう。『オリエンタリズム』を読むとき、私たちは、サイドの分析し批判した西洋のオリエンタリズムが、たんに西洋の

はこれから出掛けていって戦うべき敵のイメージを、実は意外に身近かなところで一つのたしかな実像としてつかんでいたのではないか。そしてそれこそヨーロッパ社会の中の同胞としてのユダヤ人だつたのではないか、と思うのです。その意味でも東方はヨーロッパにとつて外在的なものではなく、ユダヤ人の中に映し出されるものとしてたえずヨーロッパの内側において再生産され、内在化されていくようなものとしてあつたといえるでしょう。しかもそのゆえにこそ東方は外在化されなければならないものだったのでないでしょうか。⁽²³⁾

という「内在化」の側面は、やはり軽視してはならないように思われる。あるいは、ヨーロッパにおけるジプシーの問題。阿部謹也氏によれば、

すでに一五世紀中葉ころにジプシーはタタールであると説が普及しはじめ、おりしも深まっていた社会不安(封建的危機)のなかで、ジプシーがトルコのためにキリスト教国をスパイしているとか、ペストを広めているといった噂が流れたのである。エジプト出身説とならんで長い間ジプシーがユダヤ出身だとする説があつた。一四世紀中葉にヨーロッパ全土をペストが襲つたとき、それはキリスト教徒を絶滅しようとするユダヤ人の仕業だとされ、ユダヤ人が泉にペストの毒を入れたのだといわれた。(中略)ユダヤ人は迫害を逃れて山や崖の洞穴や深い森のなかに隠れ、数年後に出てきたときにジプシーに変身したのだと語られた。一八世

問題であるにとどまらず、私たち日本人の多くが無意識のうちに共有し、浸されている考え方なのではあるまいかという反省に立ち帰らざるをえない。それは、日本と中東、日本とアジア(第三世界)の関係を考えるとき、とくにはつきりとあらわれる問題である。

たとえば、日本と中東のあいだでは、さまざまのレビューで日本人の「オリエンタリズム」を問題にすることが可能である。まず、大衆文化やマス・メディアについて見ると、それらはかなり偏つたアラブ・イメージ、ユダヤ・イメージをつくり出していることが指摘されている。「不思議、大好き」の宣伝コピーに代表されるエキゾチックな中東イメージにはじまり、商社マンのあいだでよく問題にされる「アラブのIBM」——イン・シャー・アッラー(神が望み給えば、多分)、ボクラ(明日にしよう)、マーレーシュ(氣にするな)——という、アラブ社会を揶揄した合言葉、トマス・ハリス『ブラック・サンデー』など一連の翻訳スパイ小説にみられるテロリストとしてのアラブ・イメージ。他方では、もっぱら『ヴェニス』の商人のシャイロックと『アンネの日記』のアンネ・フランク、そしてインシュタインなどのノーベル賞受賞者・芸術家への結びつけられる、偏向した「ユダヤ人」イメージの現実もある。⁽²⁴⁾ サイドが『オリエンタリズム』第三章第四節で指摘した、現代アメリカの大衆レビューでのオリエンタリズムは、ほぼそのままの形で私たちの社会にも輸入され、存在しつづけているのである。その結果、中東世界の人々の生き生きとした現実の姿が私たちの目から奪われていることは、いうまでもない。また、わが国の中東研究というレビューで見ても、それが欧米の東洋学の多大な影響を受けて発展し

てきたものである以上、同様のオリエンタリズム的考え方を無意識のうちにも踏襲している部分は少なくないはずである。少なくとも、わが国の中東研究が、伝統的なイスラム教徒のイスラム学とも、またヨーロッパの東洋学とも違う「公平な」立場にたったものであるといえるほど、事実上単純でないように思われる。

さらに私たちは、視野を拡大して、「世界史認識」「世界史叙述」における中東とヨーロッパという問題のなかで、日本のオリエンタリズムを考えてみることも必要である。サイドも「オリエンタリズム再考」のなかで触れているように、オリエンタリズムはいわゆる「歴史主義」——ここでは、すべての歴史事象をそれぞれの時代に結びつけて相対化しつつ、その最終段階たる現代を絶対化する歴史観——、端的には西洋中心史観と分かちがたく結びついてきた。

したがって、このレヴェルでのオリエンタリズム批判は、世界史における西洋中心史観を批判的に問題にすることへとつながっていく。勿論、わが国では戦後、「世界史像」を問題にする立場から、西洋中心主義の克服のためにさまざまな試みがなされてきたことはよく知られているとおりである。たとえば、『日本国民の世界史』（一九五六年）の上原専祿氏、『東洋史と西洋史のあいだ』（一九六三年）の飯塚浩二氏、『文明の生態史観』（一九六六年）の梅棹忠夫氏等の仕事は、その代表的なものに数えられるだろう。その成果は今日に受けつがれて、歴史研究や歴史教育の面でもかなり生かされてきたといえるのかもしれない。だが、『オリエンタリズム』で問題とされているヨーロッパと中東に関するかぎり、私たちのもつ世界史像はまだまだ検討され、批判されねばならぬ部分が多いことも確かな

で、いわゆる国民性論——この場合とくに「日本人論」や日本文化論——にも触れておくことにしよう。サイドは、中東の人々の現実の姿が、西洋人によって「アラブ」「イスラム教徒」「セム族」などの大雑把なカテゴリーとしてとらえられ、それらが一貫した「アラブ的性格」「アラブの心性」等々を備えた、時間もたらず変化もしない、凝固した物体であるとみなされてきたことをくり返し述べている。そして、そうした見方の現代帰結のひとつとして、サニヤ・ハマディーの『アラブの気質と性格』のような文化人類学的研究を厳しく批判している。ここでのサイドの論点は、言語、宗教、「人種」、「民族」等の概念に基づいた一般化と、その結果としての「上からの演繹」のもつ危険性・イデオロギー性ということであった。だが、このような一般化の危険性は、中東のみならず他の地域における主観的な「民族性論」「国民性論」にもつねに潜んでいるのではあるまいか。そして、それが顕著に見られるのが、戦後の（外国人・日本人による）「日本人論」の分野ではなかっただろうか。

たとえば、ルース・ベネディクトの『菊と刀』にはじまる戦後のヨーロッパ人・アメリカ人による日本人論・日本文化論を強く批判した竹山道雄氏は、そこに、自己（ヨーロッパ）文化の理想化による他文化の価値判断、文化の複合性・歴史性を無視した安易な類型化、先入観・願望に基づく全体像の構成、特殊・部分的経験の一般化といった弊害を鋭く見てとっている。また最近では、日本人を「集団主義的」、日本社会を「タテ社会」などと概括することへの疑問を出発点として、これまでの多くの日本人論のもつ方法的欠陥

のである。たとえば、従来のいわゆる「ヨーロッパ史」にしても、「東方」を視野に入れることでその枠組が大きく揺さぶられ、その成立基盤自体が崩れさることになるはずである。ヨーロッパの源泉としてのヘレニズムとヘブライズム、ルネサンス、寛容思想、社会契約といった諸概念の再検討、十字軍、ユダヤ人、ジプシー、「東方問題」、パレスティナ問題の新たな位置付けなどは、いずれもその重要なプログラムの一環としてうかびあがってくるであろう。そして、そうしたオリエンタリズムの反映としてのヨーロッパ史を再検討する作業にさいしても、サイドの『オリエンタリズム』はひとつの重要な手がかりを与えてくれるに違いないのである。

いっぽう、いま中東にそくして考えた「日本のオリエンタリズム」の問題は、日本と東アジア（とくに中国・朝鮮）との歴史的關係を考えるときにも同様にあらわれてくる。これについては本書「訳者あとがき」を含め、すでに多くの指摘がなされており、ここで改めてとりあげるまでもないのかもしれないが、たとえば日本の東洋史学（シナ学）の性格や、大衆レヴェルでの中国観・朝鮮観、また現実の大陸侵略の歴史など、たしかにヨーロッパのオリエンタリズムと重ね合わせて考えることのできる部分は少なくない。こうして、『オリエンタリズム』の問題提起を、私たちにとって、いっそう切実な、身近な問題としてとらえ直すこともやはり必要なのである。

以上は、サイドの指摘するヨーロッパのオリエンタリズムに対応するものとしての、日本のオリエンタリズムの問題である。そこで最後に、少し視点をかえて、『オリエンタリズム』で提起されたより一般的な問題——異文化の表象・理解——に関連する主題とし

——「特殊によって一般を推定するエピソード主義や、概念規定のあいまいさや、対象の客観的属性（たとえば、性・年齢・学歴・職業・階層・階級など）の無視や、不完全なサンプリングや、比較研究の不足や、歴史的变化にたいする無関心」——を批判し、新しい日本人論を構築しようとする研究もかなり多くあらわれている。『日本人とユダヤ人』に典型的にみられる、安直な比較文化論に対する強い批判もある。さらに、「国民性」という概念のみならず、「国民」「国家」「日本人」といった観念それ自体をも再検討しようとする動きが見られるようになってきた。

いうまでもなく、国民性論そのものは必ずしも無意味なことではなく、過去においても、それぞれの時代と場所に応じ、すぐれた国民性論がくり返しあらわされてきたというべきだろう。今日でも、外国研究の最終的意義のひとつは、そうした国民的特性の把握にあるとさえ言われている。だが、その場合にも、学術的手続きの厳密さを期し、安易な一般化と「上からの演繹」をいまいめることが何より必要とされているのであり、いったんつくられたレッテル（言説）がいかに強大な力をふるうようになるかという点こそ、『オリエンタリズム』が、私たちに強く警告している問題のひとつである。

* * *

本稿では、『オリエンタリズム』の内容と意義を簡単に紹介し、そこに含まれる問題点をいくつか指摘したのち、サイドの問題提

起と私たちとの関わりについても考えてみた。勿論、触れられなかった問題はまだまだ多くあり、また、ここでとりあげた問題についても、それぞれをあまり深く掘り下げて考えることはできなかった。おそろしく「オリエンタリズム」のような問題掘起的な書物は、読者に働きかけて問題意識を触発するところにその大きな意義があるのだし、私たち読者もまた、その働きかけに答えるべく、それぞれ自分なりの読み方をすることが要求されているというべきであろう。そうした作業の手がかりとして、本稿が多少なりとも読者の役に立てば幸いである。

【註】

- (1) *Book Review Index: A Master Cumulation 1969-1979* (ed.) G. C. Tarter (Michigan, 1981) Vol. 5 pp. 6-7 及び *Book Review Digest 1979* (ed.) M. T. Mooney (New York, 1980) pp. 1105-06. リンダ・マンがあげたもののうちの三十篇以上は、これが、これには専門誌・学術誌の書評は含まれていない。
- なおサードは、本書刊行に先立ってその中核部分を新聞論評として発表している(『Arabs, Islam, and the Dogmas of the West』 in *The New York Times Book Review* Oct. 31, 1976) 、「これに関する紹介として」湯川武「アメリカの中東研究の動向——東洋学を中心として」『史学雑誌』第八十七編一九七八年十二月、三九一四九頁)がある。
- (2) ノンク語訳、*L'Orientalisme: L'Orient créé par l'Occident*, préface de Tzvetan Todorov, traduit par C. Malamoud (Paris, Seuil, 1980) エッセイ語訳 Said, E. W., *Orientalismus*, übers. von L. Weissberg (Ullstein, 1981) トルク語訳 Said, E., *Al-İstisraq: Al-Marifā, Al-Salā, Al-İskā*, tr. by Kamal Abu Deeb (Beirut, Muassasa al-Abhāh al-'Arabiya, 1981). なお、日本語版作成された

つては、ノンク語訳とアラビ語訳を手許に置いて随時参照した。とくに前者は良訳であるが、省略部分の大きい点に惜しめられ。

- (3) たとえば、ノンクスの『「ノール」誌イスマム特別号 (Recherches sur l'Islam: Histoire et Anthropologie, *Annales*, 35^e Année, n^{os} 3-4, Mai-Août, 1982, Paris) は「今日のオリエンタリズム」を問題としてとりあげ、サードの書物の詳細な書評を掲げている。(Jean-Pierre Thieck) また、合衆国の『メソ研究』誌 *Journal of Asian Studies* の「エッセイ」に「メソ研究」に対する書評シンポジウムを組み (Vol. 39, No. 3, May, 1980) 、「その会長演説」をめぐって一度行われた「エッセイ」をめぐって (Vol. 40, No. 1, Nov. 1980 及び Vol. 43, No. 1, Nov. 1983) 、「その」Maxime Rodinson, *La Fascination de l'Islam* (Paris, 1982) p. 16 及び Sāmi Khushaba, 'Al-İstisraq: Taqwīm Jadīd li-Ru'ya al-Gharb al-Fikriya li-l-Sharq' in: *Al-Ahrām*, 31, Dec. 1982 など、エッセイの著者・批評界等の動向の一端がうかがわれる。また最近の、中東関係の個別研究のなかで、とりわけ「エッセイ」の肯定的・批判的言及が見受けられるものがある。
- (4) たとえば、『エッセイ』と接触された『メソの共同体』概念の再検討を行なった、インズワットの論文(『エッセイ』の「メソ」の近代絵画のオリエンタリズムを論じた美術史の阿部良雄氏の論文(『メソ』・カーディヤの降伏——表象論のメソロジーの次元——)『社会史研究』六一一九八五年八月) 及び雑誌『G』の第三号(一九八五年十月)の特集「メソ」など。
- (5) Henri Pirenne, *Mahomet et Charlemagne* (1922) [H. ショントク『ヨーロッパ世界の誕生——トルコとヨーロッパ——』佐々木克己・中村英典「創文社」一九六〇年]; Christopher Dawson, *Making of Europe* (1932); Norman Daniel, *Islam and the West—The Making of an Image* (Edinburgh, 1960); R. W. Southern, *Western Views of Islam in the Middle Ages* (Harvard U. P. 1962) [R. W. サキーン『ヨーロッパと世界』鈴木利章訳、岩波書

- 店』一九八〇年]; Jacques Waardenburg, *L'Islam dans le Miroir de l'Occident* (La Haye, 1963); W. M. Watt, *The Influence of Islam on Medieval Europe* (Edinburgh, 1972) [W. マット・ワット『中世ヨーロッパ——ヨーロッパの社会』三木直訳、筑摩書房一九八四年]; Maxime Rodinson, "The Western Image and Western Studies of Islam" in *The Legacy of Islam* 2nd edition, ed. by J. Schacht and C. E. Bosworth (Oxford U. P. 1979). 以下は、著者によつて M. Rodinson, *La Fascination de l'Islam* 収録のもの。また、『エッセイ』の前後に、Hichem Djait, *L'Europe et l'Islam* (Paris, Seuil, 1978) [著者 *Europe and Islam* tr. by Peter Heinegg (U. of California Press, 1985) 及び Rana Kabbani *Europe's Myths of Orient—Devise and Rule* (Macmillan, 1986) 等の重訳がある。その後者は『エッセイ』の論議に感づいた。なお、前記ロマン論文に關しては、矢島文夫「エッセイとエッセイ」(『現代思想』一九八〇年二月)が参考になる。
- (6) Gustave Dugnt, *Histoire des orientalistes de l'Europe du XIX^e au XIX^e siècle* (Paris, 1868-70); Jules Mohl, *Vingt-sept Ans d'histoire des études orientales* (Paris, 1879-80); Najib al-'Aqidi, *Al-Mustashriqin* (Cairo, Dar al-Ma'arif, 1980); Johann W. Fück, *Die Arabischen Studien in Europa bis in den Anfang des 20. Jahrhunderts* (Leipzig, 1955); I. Krachkovskii, *Ocherki po istorii Russkoi Arabistiki* (Moskva-Leningrad, 1950); Ahmad Samiyūvich, *Rafā' al-İstisraq wa Athar-hā fi al-Adab al-'Arabi al-Mu'āsir* (Cairo, Dar al-Ma'arif, 1980).
- (7) Anwar Abdel Malek, "Orientalism in Crisis," *Diogenes* 44 (1963) [「包蔵の東洋学」ノンネート・トント『民族の革命』藤田孝典「岩波書房」一九七四年所収]; Abdullāh Laroui, "Pour une méthodologie des études islamiques: L'Islam au miroir de Gustave von Gruneham," *Diogenes* 83 (1973) [「エッセイ」の著者「岩波書房」所収]; A. L. Tibawi, 著『エッセイ』(一九七四年十一月)所収]; A. L. Tibawi,

- Second Critique of English-speaking Orientalists and their Approach to Islam and the Arabs* (London: The Islamic Cultural Centre, 1979). 及び Anwar al-Jundi, "Athar al-İstisraq fi al-Adab al-'Arabi" in *Khasā'is al-Adab al-'Arabi fi Marwā'ihā Nazariyat al-Naghd al-Adabi al-Hadith* (Cairo: Dar al-İfṣām, 1975) 及び
- (8) J. H. Plumb, "Looking East in Error" in *The New York Times Book Review* (Feb. 18, 1979) p. 3, p. 28; Desmond Stewart, "East is east" in *Spectator* (Jan. 27, 1979) p. 20; C. F. Beckingham's Review in *Journal of the Near Eastern Studies* 42, (1979) pp. 582-64 及び 著者による *doxological* 及び「米米語訳」(二二頁) 一三二頁 一五〇頁) 'dynastic' 及び「中絶」(二二頁) 一三二頁「大絶」(一三二頁 一五〇頁) beginnings 及び「絶」(一六頁) など。
- (9) J. H. Plumb, *ibid.* p. 3; Thomas M. Greene, "One World, Divisible," in *The Yale Review* Vol. 68, p. 579; Edmund White, "Dispelling Myths of the East," in *The Guardian* (Feb. 4, 1979) p. 18; Victor Brombert, "Orientalism and the Scandals of Scholarship," in *The American Scholar* Vol. 48 (1979), p. 540 及び 著者
- (10) C. F. Beckingham, *ibid.*; Fedwa Malti-Douglas, "Re-orienting Orientalism," in *The Virginia Quarterly Review* Vol. 55 (1979), p. 725.
- (11) T. M. Greene, *ibid.* p. 581; D. J. Enright, "The East in Fee," in *The Listener* (Mar. 15, 1979), p. 381; Ross Chambers, "Representation and Authority," in *Comparative Studies in Society and History* Vol. 22 (1980), p. 512.
- (12) E. White, *ibid.*; Benjamin I. Schwartz, "Area Studies as a Critical Discipline," in *Journal of Asian Studies* Vol. 40 (1980), p. 22.
- (13) E. White, *ibid.*; B. I. Schwartz, *ibid.*; V. Brombert, *ibid.* p. 538; Amal Rassam, "Representation and Aggression," in *Comparative Studies in Society and History* Vol. 22, p. 508.

- (14) C. F. Beckingham, *ibid.* p. 562; Peter Conrad, "The Imperial Imagination," in *New Statesman* (Jan. 25, 1979), p. 117; Jean-Pierre Thieck, "E. W. Said, Orientalism," in *Annals* 35 (Mai-Août, 1980), p. 514.
- (15) Albert Hourani, "The Road to Morocco," in *The New York Review of Books* (Mar. 8, 1979) pp. 29-30. ちなみにこの Hourani の書評は『オリエンタリズム』に寄せられた多くの書評中もっとも公正で、*『オリエンタリズム』* にならなかつたものになつてゐる。
- (16) F. Malt-Douglas, *ibid.* pp. 727-28.
- (17) A. Hourani, *ibid.* p. 30.
- (18) F. Malt-Douglas, *ibid.* pp. 730-32.
- (19) B. I. Schwartz, *ibid.* p. 16.
- (20) たとえば「シンポジウム 地域研究の問題点」(『教養学科紀要』第十三号、東京大学教養学部、一九八一年)中の「アジア」(板垣雄三)二七一九頁。
- (21) 板垣雄三「東方問題再考」(『歴史評論』一九八一年一月)一五一—一六六頁。
- (22) 阿部謹也『中世を旅する人びと』平凡社、一九七八年、一六〇頁。
- (23) 森詠「マス・メディアと中東・アラブ・パレスチナ」および阪東淑子「パレスチナ問題と日本人の意識構造——わたしたちの中東認識、パレスチナ問題認識を妨げているもの」(板垣雄三・吉田悟郎編『パレスチナ人とユダヤ人——日本から中東をみる視点』三省堂、一九八四年、所収)。
- (24) 長沼宗昭「日本のなかのユダヤ人イメージ——ユダヤ人とは何か」(前掲書『パレスチナ人とユダヤ人』所収)。
- (25) たとえば前掲の、板垣雄三「東方問題再考」などが手がかりとなる。
- (26) 「外国人の日本文化批判」 竹山道雄『主役としての近代』(講談社学術文庫、一九八四年)所収。
- (27) 杉本良夫、ロス・マオア編著『日本人論に関する12章』(学陽書房、一九八二年)三頁。

- (28) イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』に対する批判としては、板垣雄三「シオニズムの反セミティズム性とナチズムのシオニズム性」(『現代史研究』第二十七号、一九七三年、所収)、浅見定雄『にせユダヤ人と日本人』朝日新聞社、一九八三年。また、この種の対比研究一般に対する批判として、今道友信・西尾幹二(対談)「比較研究の陥穽」(『理想』一九七八年四月号所収)三二—三三頁が参考になる。
- (29) 阪東淑子前掲論文、参照。なお、哲学者のヴィトゲンシュタインは「国民性」という曖昧な概念を全く認めようとしなかつたという。この興味深いエピソードは、N・マルコム他『回想のヴィトゲンシュタイン』藤本隆志訳(法政大学出版局、一九七四年)五五—五六頁、六七頁に記されている。

訳者あとがき

今沢紀子

本書は Edward W. Said, *Orientalism* (Georges Borchardt Inc., New York 1978) の全訳である。なお、この日本語版では、著者が原著刊行後、数多く寄せられた論評・書評を踏まえたくえて新たに書き下した論考「Orientalism reconsidered」の全文を訳出し、本文末に付した。著者のサイドは一九三五年、イギリスの委任統治下にあったパレスチナのイェルサレムに生まれた。三十年代半ばといえ、ナチスの迫害を逃れたユダヤ人入植者の急増によって、アラブ・パレスチナ人の権利が奪い去られる方向でパレスチナ社会が激動した時期に当たる。まさにその時期にサイドは生を享けたのだ。やがてサイドは異邦に移り住むことになり、カイロのヴィクトリア・カレッジで教育を受け、その後アメリカ合衆国に渡ってプリンストン、ハーヴァードの両大学で学位を取得、そのまま学究生活に入った。一九七〇年以降、コロンビア大学の英文学・比較文学教授として今日に至っている。なおこの間に彼は合衆国市民権を取得している。著書としては本書のほか「Joseph Conrad and the Fiction of Autobiography」(66), *Beginnings: Intention and Method* (75), *The Question of Palestine* (80), *Literature and Society* (80) [編著], *Covering Islam* (81) [みすず書房より邦訳近刊の予定], *The World, The Text, and the Critic* (83)

〔平凡社より邦訳近刊〕がある。書名からもうかがわれるとおり、サイドは専門の英文学・比較文学分野の著作を発表するかたわら、パレスチナ問題にも深い関心を寄せており、PNC(パレスチナ国民議会)の議員として、また合衆国における親PLO派知識人の代表的存在として実践活動にもたずさわっている。ちなみに、雑誌『世界』(岩波書店、一九八二年三月号)に彼の論文の邦訳「パレスチナ民族自決の論理」が掲載され、彼のパレスチナ問題に対する考え方の一端はすでに日本にも紹介されている。本書『オリエンタリズム』は、西洋のさまざまな研究方法を身につけたサイドの人文科学者としての一面と、みずからの文化的自己確認を問い直すとうとする彼のパレスチナ人としての一面とが、二つながら反映された作品である。

本書における方法論上の特徴としては、次の二点を指摘することができる。その一つは「オリエンタリズム」という語の従来の意味に加えて、さらに新しい意味を発見し、それらを考察していることである。「オリエンタリズム」とは、従来、東洋学ないし東洋趣味と理解されてきた。しかしサイドはこれを、「西洋の東洋に対する思考の様式」を示す語として、また「西洋の東洋に対する支配の様式」を示す語としても用いている。本書によって「オリエンタリズム」概念に関する社会的理解に変化が生じ、今後英和辞典の訳語の選定にあたって一考を要するような事態が訪れる可能性もある。もう一つの特徴は第一の特徴として述べた点とも密接に関連するが、ミンヘル・フーローの「言説」概念を援用していることである。サイドは「西洋の東洋に対する支配の様式」としての「オリエン